熊本大学学術リポジトリ

ちぎれ雲 ： 文苑

著者	卯の花
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１０３
ページ	２５-３０
発行年	1903-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/5645

に少年は泣き出した、兄は泥堪へすに顔をろむけた。更に一刀横一文字に加へられて十字に開かれた傷口からは膿交ぢりの血が流れ出る、K君は慣れたものでその中を斟酌なしに掻き交せる、少年の涕泣は他人の僕さへ聞くに忍びなかつた。況して兄の身になつては。

此の時ふと一人の亡弟を想ひ出した、嘗つて僕が彼とジャクナイフを爭つた時誤つて母指を傷けたので彼は譬へ難き悔と同情との溢れた顔付きで心からあやまつたが、今その通りあり〳〵と僕の眼前に現はれたので。

回顧すれば彼が亡くなつたのも丁度此の少年の年ごろであつた。

ちぎれ雲

卯の花

おもへば心あやしくも動かるゝかな、今夏君と暑を湘南に避けて、潮寄せ鷗翔るほとり、海上万斛の涼風に對せしは已に過去の夢となりぬ。當時相共に青春の希望を語りていかに思邪なかりしぞ。たわいなきことに興を催ふしては笑ひさゝめき、はた君が手づさむ寫生畫の拙なきに一驚を喫して拍手して笑ひしこともありしなり、今や瑤落の秋たけ、悲風空しく遊子の愁を吹く、人生岐路多くして君は信濃路遠く山に入り、われは筑紫潟遙かに杏城の客となりぬ。空を眺むれば茫々として雲漠々、海を望めば洋々として水漫々。落葉しげき夕、君はかの時のことしのび出づるやいかに。

○

一葉の扁舟に涼風を趁ふて、茅島あたり漁りするや、まこと獲魚は少なかりき。されど松くねる危き岩が根に踞して海洋の夕景をめでし時、いかに感深かりしぞや、想像の翼は快感に駕して遠く沖ゆく眞帆片帆に伴なひ、われ知らず唱い出せし讃美歌の、松の籟に和して磯の彼方に響き渡りし時砂にさわぐ波の調もおのづから平和の象を示せしにあらずや。タイムは流れ〳〵てすべてを忘却の冥府に葬り去るも相思ふ清き情をいかにせんや、君と別れてし今、かの時を追懷ふ心のいや増るかな。あゝ君かき鳴らす吾妻小琴の音、潮のさゝやき妙にやさし。君や調ぶる十三絃の音、稍にふせぶ秋風の聲いと疾し。潮汪々風蕭々、君よ若葉の夢なはありや。

○

されど君よ悲愁はわれらの事にあらざりけり。願くは顔をあげて夕榮の空を見よ、淡紅の雲ゆるく流るゝ所、平和の象悠々たるにあらずや。雲間より射る光の征矢は楓の林に入りて一しほ華かに、映るふ水の面に琥珀の色を流すなり。君よ神の榮光をこの平和の天地に見ざるか、愛の姿を仰がざるか。君よしばらく心靈の奥殿を開き、以て愛なる父と交通せよ。あゝ如何にその樂しきかよ。われ等は斑点も汚穢も拭はれ、憂きも悲みもみな慰められんなり。愁ひに沈む君よ、夕陽沒する間の暫時を祈禱の時に費やし、惠みと康きとを享受よ、而して西の空なるわれと靈の交を成さしめよ。うよぐ夕風、ひびく暮鐘、何れかこれ相思の情を通せざるべき。

○

珍しくも確水紫の色濃き紅葉送り給ひし君のいかに優しきかよ。懐しき君よ、山路遥かにしら雲多き郷に去りにし君よ、紅の血潮に染みたちん如き一葉二葉の楓の色に、君が赤き心をわれは謝す。あはれ、萩の友摺れ、ろこに幽韻をかなづるあらば、これ風に托せるわが應酬の響と知らずや。

○

君よ、悲愁はわれ等のことにあらずとわれは云ひき、されど君よ、若きわれらになどて愁のなからざらんや、いと聖く高き愛の力にはだされて、人の世に超然として罪の思ひは去れど、あゝ若きわれらに血潮の燃ゆるをいかにすべき。血潮の燃ゆる時そこに罪のおもひたへやらも、戰く心を鞭ちて清き心を勵ませぞ、若きわれ等は憂ひなり、あゝ能はざるなき天の神よ、願くは嫉み、忌み、羨み、恐り、恨み、歎く心を去り、愛の甘酒に醉ひて花の間に戯むるゝ蝴蝶の平和の姿、優しき心を與へ給へ。これわれらが盡きざる願なり、あゝわれは長へに君と共に青春の希望を追はん、而して測られざる神の愛の内に在りて人生の向上を完うせんかな。願くは祝福君に在れ。

○

東の方星一つ流れ行きぬ、汝れよいかなれば罪の此の世を戀ひて來りしや、いと高き所にもまた歎きたへざるにか、天の高きを捨てゝ地の低きにつき、ときしへの悲み味ひて苦しみ悶ゆる星ぞげに憐れなる。戀を求めて泣く若き子等よ、流れし星の行く先を探ねて、而して慈愛の眼を以て見給ふ神の光の清く尊く、いかに慕しきかを學べ。明星はとはに眞如の光りを放ちて笑み居るにあらずや。

○

日もやう〳〵暮あいの鐘の韻、きゝつゝたどるは繪津湖の長堤、憂ひを含める雲は林に隱れ、眉より細き三日月は松のあはひにきらめきぬ、淋しさの餘り又も催さるゝは懷舊の情、有りし昔の俤になん。「御月さん幾つ十三、七ッ其れ又若いね……」とは幾度か乳母の脊にて云ひけん言葉なるか而も今同じ月に對して美しき心に眺むる能はざるは如何に悲しき業なるよ。

たゞいたづらに月を眺めて泣くにあらず。胸の思ひにたへかねて、かの仲麿が唐越にて「三笠の山に出でし月かも」と云ひしが如く、我れまた心のさま〳〵にて、ろこはかとなく世の憂ふしも思ひ出さるゝなれ「一夜不眠孤客耳、主人門外有芭蕉」の句を難じて「芭蕉葉上無愁雨、耳是多情聽斷腸」と正せしも實にさる事とぞ思はる。心の雲を去りて汚なき眞如の月を眺めたらんにはいかに嬉れしからん、いかに樂しからん、あゝ重き罪の荷、いためる我が心は、げに堪ね得ざるなり。

○

あゝはかなきの人生や、長しと云はゞ五十年、短しと云はゞ五十年、たれか此の間の奧妙なる秘密を解するものぞ、神のみ獨り是れを主宰し給ふ。barry cornwall の life を讀み人生の不可解を疑ひ去つて其攝理を學び再びロンクフエローの人生觀に行け。

Life　　Cornwall

We are born; we laugh; we weep;
We love; we droop; we die!
Ah! wherefore do we laugh or weep?

Why do we live or die?
Who knows that secret deep?.
Alas, not I!

Why doth the violet spring
Unseen by human eye?
Who do the radiant seasons bring
Sweet thought that quickly fly?
Why do our fond hearts cling
To thing that die?

We toil—through pain and wrong;
Ue fight—and fly;
We love; we lose; and then, are long,
Stone-dead we die.
O life! is all thy song
"Endure and-die?"

○

『われはシャロンの野の谷の百合花なり』荊棘の中の百合花、森の内の林檎、甘き其の實、實に我れの力なり、われは葡萄の甘き酒に醉ひ、神の愛の御手に抱かれ靜かに眠る小羊たらん、

『われはシャロンの野の谷の花なり』『ソロモンの榮華の極みだに我れには及ばざりき』。

新体詩

夢の香

（わが故郷の詩友曉聲に與へたる）

内田夕闇

○その一

ふる里遠くはなれ來て　あけぼのひとり目覺めては
迷ふは阿蘇のふもと原　森の木蔭に露おびて
何慰めの花もなく　羽風もかろき白鳩の
迷ふは阿蘇のふもと原　やさしき君を思ふかな

笛聲を得ざりし小羊の　よべ夢に見し君が笛
力つかれてあゆみより　いつひびくかと疑はれ
人になさけを乞ふ如く　彩ある雲の間をば
かうべを垂るゝ暮の闇　希望に饑ゑて窺ふを